■日　時：２０２０年２月２日（日）
■場　所：立川教会
■説教題：「真実に神を礼拝する者となるために」
■説教者：飯島　信
■聖　書：旧約 列王記上８：22－30（旧 p541）
　　新約 ヨハネによる福音書２：13－25（新 p166）
■**讃美歌**：6**「つくりぬしを賛美します」**227「主の真理は」

お早うございます。
2 月になりました。
1 年で一番寒い季節です。
春節と言う、日本では正月にあたる最も大きな行事の只中において起きた今回の中国での出来事は、深く心痛める出来事であり、犠牲者が一人でも少なくなることを祈るばかりです。
渦中にいる人々の恐れと慄（おのの）きはどれほどのものかと思います。特に抵抗力のない幼い子や高齢者を抱えた家族の心配を思う時、一日も早く事態が収まるのを願わずにはいられません。本当に、全く予想の出来ない事件が、不意に私たちを襲って来ます。日本にいる私たちですが、外出時のマスクの着用など、出来ることを心がけたいと思います。
厳しい現実の中にあって、心温まる話がそれでも伝わって来るのは救いです。
日本から送られた救援物資の段ボールの箱に、励ましの言葉が中国語で書かれ、そのことを感謝するメッセージが SNS で拡散しているとの報道です。このことを知った時、やはり私の心には温かな思いがこみ上げます。人と人との心を通わせるのは、誰もの心にある善意であることを改めて思わされました。

さて、今日与えられた聖書の御言葉は、先週のカナで水をぶどう酒に変えられたイエス様が、続いてガリラヤからエルサレムに上り、神殿で行ったことの話しです。
今、司式者に読んでいただいた内容ですが、カナの婚礼の話しが祝福に満ちた結婚式を舞台にした話しだとすれば、このエルサレムでの話しは、神殿を舞台にした、神を礼拝するとはどのようなことかを語る話しです。
話しの筋は明快です。
イエス様が神を礼拝するためにエルサレム神殿に上った時、そこには、犠牲の供え物を捧げる人々を客として牛、羊、鳩を売る者や、両替人がいたのです。それを見たイエス様は縄で鞭を作り、羊や牛を境内から追い出し、両替人の金をまき散らします。つまり、神に捧げると言う口実で行われていた神殿でのあらゆる商売を否定したのです。
すさまじい場面であったと思います。追い散らされた牛や羊の鳴き声、怒り狂った商売人たちの怒号、そして又金をまき散らされた両替人が慌てふためいて金を拾い集める様子な

ど、境内は騒然とし、多くの民衆は何事が起きたのかと遠巻きに見守っていたに違いありません。そのような中で、イエス様は言われました。「このような物はここから運び出せ。わたしの父の家を商売の家としてはならない。」

宮清めと言う名で知られている場面です。
しかし、ここで不思議に思うことがあります。
神殿で神を礼拝する時に犠牲の献げ物をすることは、律法の規定にも記されていることでした。イエス様は、もちろんその事をご存知です。にもかかわらず、この激しい怒りは何であったのでしょうか？
それは、商人や両替人だけの問題ではありませんでした。その背後に、彼らに商売をさせ、不当な利益を貪っていた祭司たちがいて、神殿の腐敗・堕落の原因となっていたからです。イエス様の怒りは、そこに向けられていたのです。真実をもって神に仕え、神を礼拝する場を、人間の欲望の場としていることへの怒りでした。

この宮清めの話しを読み進んだ時、私にはもう一つの聖書の場面が鮮やかに脳裏に蘇って来るのです。新共同訳聖書 88 頁、マルコによる福音書第 12 章 41 節から 44 節、一人の貧しい女性の献金の話しです。

４１：イエスは賽銭箱の向かいに座って、群衆がそれに金を入れる様子を見ておられた。多勢の金持ちがたくさん入れていた。
４２：ところが、一人の貧しいやもめが来て、レプトン銅貨 2 枚、すなわち 1 クァドランスを入れた。
４３：イエスは、弟子たちを呼び寄せて言われた。「はっきり言っておく。この貧しいやもめは、賽銭箱入れている人の中で、だれよりもたくさん入れた。
４４：皆は有り余る中から入れたが、この人は、乏しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れたからである。」

この二つの話しは、私たちの教会生活にとって、とても大切な内容を持っています。それは、私たちが神様を礼拝する時の心の在り方を問うているからです。
先の神殿で商売をして儲けている者、そして彼らに商売をさせ、不当な利益を貪っている祭司たち、一体何が問題なのでしょうか。
それは、神殿を利用して自分を利する行為を行っているからです。
つまり、神様に仕えるのではなく、自分の欲望に仕えているのです。牛を売り、羊を売り、鳩を売る。いつしか彼らの心は、神様から離れ、自分の利益を追い求める者となりました。イエス様が激しく怒り、商売人全てを神殿から追い出し、又商売させることによって暴利を貪っていた祭司たちの在り方を断罪したのは、神に仕え、礼拝する場であるべき神殿を、神

ならぬ自分に仕え、自分の私腹を肥やす場としていたからです。
　その一方で、貧しいやもめに対する礼賛は、私腹を肥やしていた彼らとは全く反対に、自分の持っている物全てを差し出して神に仕え、神を礼拝していたからです。

　しかし、この二つの話しは、実は私たちの教会生活をも問うています。
　何のために教会に来ているのかとの問いです。ただ神様のため、神様の栄光を現すためにか、それとも自分のこの世的な願いを満足させ、人々から褒められ、自分に栄光を帰するためにかです。

　立川教会に赴任して間もなく 4 年が終わります。
　礼拝出席 25 人前後の決して大きくない教会ですが、私は、教会員、あるいは礼拝出席者の一人として、栄光を自分に帰するために教会生活を送っている人に出会ったことがありません。皆、ただひたすら神様に仕えようとし、黙々と教会が必要とする課題を見つけ、担っています。
　そのような意味において、この立川教会は、いつイエス様が扉を叩いて中に入って来られても、迎え入れる準備が出来ていると思うのです。
　幸せなことです。

　そのような私たちではあるのですが、後一つ、もう一度振り返りたいことがあります。
　それは、あの貧しい女性の献金の意味です。
　あの女性のレプトン銅貨 2 枚の献金が意味しているのは、献金額が多い少ないではありません。神様に仕え、神様の栄光を現すために、月々自分が受け取る収入からどれだけを神様にお返しするかと言う問いかけなのです。
　私は、献金と言うのは、密室での祈りと同じで、神様と私とのただ二人だけの間で決めることだと思います。誰に相談することもなく、ただ神様に仕え、神様に栄光を現すに相応しい額を神様から与えられた生活費の中から捧げるのです。

　宮清めの後、イエス様は、ユダヤ人から厳しい問いかけを受けます。
　腐敗と堕落の原因である自分たちの存在を否定された彼らにとって、イエス様の行為を黙って見過ごすことが出来ませんでした。そして問うのです。神殿から商人を追い出すとは、一体どのような権威があってそのような大それた事を行うのか、それを示してみよと。
　その問いに対し、イエス様は、「この神殿を倒してみよ」との言葉で自らの十字架による贖いの死を予告し、又、「三日で建て直して見せる」との言葉で復活を予告します。しかし、イエス様こそ、真実に屠（ほふ）られる犠牲の子羊であるとのこの言葉は、ユダヤ人にも弟子たちにさえも理解出来ませんでした。弟子たちがこの言葉の意味を知るのは、復活の主に出会った時でした。

ただ神様に仕え、神様の栄光を現すために、休むことなく礼拝を守り、教会での様々な働きに奉仕し、教会の働きをしっかり支える者となりたいと思います。

祈りましょう。